

38年間病気だった人のいやし

ヨハネの福音書 5:1～9



その後、ユダヤ人の祭りがあって、イエスはエルサレムに上られた。さて、エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があって、五つの回廊がついていた。

その中に大ぜいの病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者が伏せっていた。そこに、三十八年もの間、病気にかかっている人がいた。イエスは彼が伏せっているのを見、それがもう長い間のことなのを知って、彼に言われた。

「よくなりたいか。」

病人は答えた。

「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。」

イエスは彼に言われた。

「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」すると、その人はすぐに直って、床を取り上げて歩き出した。

永遠のいのち

ヨハネの福音書のテーマは「永遠のいのち」です。単に、生物学的に生きる、存在するという意味以上に、神とのかかわりをもって生きることが「永遠のいのち」ということです。

「永遠のいのち」は神秘であり、そのいのちは愛そのものであり、創造的な力を秘めているのです。

「ベテスダ」の池

ベテスダとは「憐れみの家」という意味です。

ベテスダの池には重い病気に悩まされている人たちが集まっていました。聖書には「**大ぜいの病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者**が伏せっていた。」とあります。

この人たちの日課は、ただ水が動くのをじっと待っている生活です。時たま、主の使いが降りてきて水をかき回して、水が動いた時、真っ先に池の中に入った者はどんな病気でも癒されるからです。



人の霊的な現実

ベテスダの池にいる人々は、神の目から見ると単に身体が病気だとか身体が不自由という意味だけでなく、そこに霊的な意味合いを含めて考えてもいいのではないかと思います。

1. 「病人」 その原因がなんであれ、自分のしたいことができない状態。正しいと分かっているけど、そうすることができないで、正しくないことをしてしまう姿。

2. 「盲人」 見えるべきものが見えないこと。真理の光を知らない、それゆえに見ることができない状態。神の世界は神の光によって照らされることなしには決して見ることのできない世界で。闇の中にいる状態、そして自分が闇の中にいることさえもわからない状態。

3. 「足なえ」 なんども決心して歩み始めるが、いつも足が思うようにいかず、挫折や失敗を繰り返してしまう人の状態。自分で自分をどうすることも出来ない現実。

4. 「やせ衰えた者」 これは生きる力、勇気といったものが欠如している状態。生きる意欲に欠ける人は、まさに「やせ衰えた者」と言える。

「よくなりたいか」

38年もの間、病気にかかって、伏せっている人を見たイエスは、こう語りかけます。「**よくなりたいか**」と、・・・これは霊的には、神の「永遠のいのち」をいただき、神と共に生きたいのか？という人生で最大の問いかけではないでしょうか。

人の意志に働きかけられたイエス

人生において、ただ待っているだけでは、新しい人生を出発することはできません。しかし失望した心に希望の言葉を与えることは決して容易なことではありません。そんな時イエスは彼に対する二度目のことばを語ります。

「**起きて、床を取り上げて、歩きなさい**」と。

私たちは「そうしたいのですが、これこれできないのです。」とつぶやいてしまいます。

「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。」

(ヨハネ5:7)

そんな私たちにイエスは、信仰の決断と行動をうながされます。

志を立てさせられる主

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。(ピリピ2:13-14)

オランダの神学者ヤコブ・アルミニウスは神の救いにおいて、神の恵みとともに人の自由意志にも目を留めた。



ヤコブ・アルミニウス
1560年-1609年

神の哀れみと恵みは 予定されるものではない

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

(ヨハネ3:16-17)

もし、正しい人がその正しい行ないをやめて、不正を行なうなら、わたしは彼の前につまづきを置く。彼は死ななければならない。

(エゼキエル3:20)

創造的人生を生きる

100歳を越えても現役の医師として働かれた日野原重明氏は「老いることはまた楽しからずや。ただし、はじめることを忘れさえしなければ・・・」とおっしゃっている。

この意味は、老いることも決して悪くない。楽しいことだ。ただ、はじめることさえ忘れなければ。新しいことをはじめる人は老いないということ。逆に、新しいことをはじめることをしない人は、若くても老いるという意味だそうです。

「はじめる」とはどういうことか。日野原氏は「それは、今まで生きてきた世界とは別の地に、新たに挿し木をするというのではなく、自分という老木の、まだ芽を出しえる枝を接ぎ木して、いのちの水を吸い上げることなのである」と。

イエスの言われた「**起きて、床を取り上げて、歩きなさい**」とのことばは、私たちの人生において、新しくはじめる勇気を持つことを呼びかけているように思えます。

それは主とともに、主にあつてのみ可能です。この呼びかけに応答して「**起きた人**」に、神の栄光が現わされたことは言うまでもありません。